

## 外来語の表記に関する委員アンケートのまとめ (案)

※ 原則として各委員の回答をそのまま生かしているが、一部、公用文表記の考え方に合わせるなど、調整を加えたところがある。

問1 現在の社会生活において使用されている外来語の表記について、全般的に気になっていること、課題であると考えることがありますか。(例：分かりにくさ、表記の揺れ等)

### 「外来語」の定義

○ 他の言語では借用語なのに日本語についてだけ外来語という。漢語との区別なのだろうが中国語以外でも、奈良に代表される地名に残る朝鮮半島由来の言葉、戦国時代の煙管や襦袢や煙草は外来語扱いしない。

「外来語の表記」の表には片仮名しかない。外来語は片仮名で書くことになっている。外来語は主に明治以降に欧米から入ってきた言葉が対象ということの表れと思うが、近年は欧米以外を由来とする言葉が増えている。新たに入ってきた中国語や韓国語由来の言葉はどう扱うのか。例えば、昨年の流行語大賞の候補に入った「麻辣湯」は漢字で書き、マールータンと読む。一方、上場企業は中国現地法人の人事異動では役職を「総経理」「董事長」などと表記し、日本式に「そうけいり」「とうじちょう」と読んでいる。「韓流」と書いて「はんりゅう」と読む。議論の大前提として外来語の定義について検討することが必要と思う。

### 表記の揺れ

○ 単なる表記のゆれではなく、別語（別の意味）を表す場合がある。(例：インキとインク、テキストとテクスト、エネルギーとエナジー)

インキとインクについては、「国語に関する世論調査」では「インク」使用者が約8割という結果が存在するが、「インキ」は印刷業界で使用されるとも言われ、単なる表記のゆれとは言えない面がある。(Word でこの文書を入力していると、「テキストとテクスト」にのみ表記のゆれを知らせる青い下線がつく。インキとインク、エネルギーとエナジーは、Word は表記のゆれと判定しない。どのような基準で「表記のゆれ」としているのか、気になるところである。)

○ 表記のゆれのようにも見えるが、元の語が異なる語群がある。(例：ボール(ball)とボウル(bowl)、バレー (volleyball) とバレエ (ballet))

このような例において、表記と意味の対応関係が社会における共通認識になっているかどうかは不明である。語によって異なると思われ、世代差、地域差、位相差もありそうである。

「世代差のある言葉についての話題が、世代を超えて会話の糸口になることもある」と学生から聞いた。また、文脈を考慮すれば、日常のコミュニケーションにおいて支障をきたすことはない。そのため、必ずしも「課題」とは言えないのだが、日本語を非母語とする人たちにとっては難しい

ものであろうと思う。

- 意味の分からない外来語がカタカナで表記されていることがあり、課題と考えます。加えて、技術文書や製品の「利用者用情報」における「表記の揺れ」も大きな課題です。例えば、「サーバ／サーバー」「コンピュータ／コンピューター」といった長音の有無などの不統一は、高度化した検索システムにおいて、ユーザーがキーワード検索を行う際の「検索漏れ（ノイズ）」を引き起こします。また、生成 AI や機械翻訳の処理においても表記の不統一は読解精度を低下させる原因となっており、ユーザーへ正確に情報を伝えるための障壁となっています。
- これまで、コーパスを活用して外来語の表記について調査を行ってきました。その結果を見ると、『外来語の表記』の原則に基づく表記で安定している語がある一方で、原則とは異なる表記が増加している語もあり、表記にゆれが生じています。

この原則とは異なる表記は、主に原語の発音を重視したものです。このような表記が増えることで、外来語の発音と表記とにずれが生じています。例えば、連母音 [ei] を含む外来語では、長音表記ではなく、連母音表記が増えています。話し言葉コーパスで発音を調査すると、長音による発音の方が圧倒的に多いという状況にあります。

また、表記にゆれの見られる語の中には、表記のゆれというよりは、意味・用法による使い分けと捉えられるものもあります。例えば、「ディスプレイ」（展示）と「ディスプレイ」（PC 等のモニター）のような例です。

原則とは異なる表記は、今後も広がっていくのではないかと思います。この機会に、現状の問題について整理し、必要に応じて外来語の表記に関する考え方を提示するなどの対応を検討する必要があると思います。
- 「サステナブル／サスティナブル」のように、慣用といえるものがはっきりとはない段階で表記がゆれている場合に、どこまで統一することが求められているのかが気になっています。

#### 外来語の分かりにくさ

- 外来語の外形的な「表記」の問題には直接当てはまらないかもしれませんが、最も問題であり、また、喫緊の課題だとも思われるのは、外来語（特にカタカナ語）の意味が原語とずれているものや、そもそも外国語に存在しないものが多いという点です。

いわゆる和製英語に顕著ですが、たとえば「クレーム」「マンション」「ナイーブ」「サラリーマン」「スキンシップ」「ガソリンスタンド」等々、英語圏の方々に対して使っても通じなかったり、あるいは、全く別の意味に受け取られてしまったりする言葉があまりに多いと言わざるをえません（同様のことは、フランス語やドイツ語などに由来する外来語についてもある程度当てはまります）。

以上の問題は、外国語の学習に際して大きな障害となっていますし、また、国際的なコミュニケーションにおいてしばしば深刻な誤解を生む原因にもなっています。少なくとも、公用文などで外来語を用いる際には、そもそもこの言葉はカタカナ語として表記すべきか、この表記をこの意味で

世の中に広く流通させるべきか、という点について事前に慎重に検討することを公的な方針として打ち出し、各種メディアなどに対しても同様の検討を呼びかけるべきだと考えます。

- 外来語の流入に際し、明治時代には多く漢語に置き換えることで対応しましたが、昨今では（特に英語の単語や語句は）そのまま原音に近づけた片仮名表記に置き換えたり、長い語句の場合は、いわゆるイニシャル語で表したりすることが増えているように思われます。英語の習熟度によって理解の度合いが異なり、意思疎通に不便を感じている人が多いのではないのでしょうか。特に、これまで漢語で表現していた語をことさら片仮名表記語に改める傾向（証拠→エビデンス、柔軟→フレキシブルなど）には否定的な意見も多く耳にします。（これは、外来語の「表記」というよりは、外来語そのものに係ることですので、ごく参考までにいただければ幸いです。ただこのようにカタカナ語が増えてゆくに伴いその「表記」にも影響は及ぶと考えられますので一応ここに記しました）
- 外来語の使用が増えており、近年は特に PC やインターネット、AI などの分野において、新しい外来語が急速に増えているように感じています。例えば、「スワイプ」や「タップ」、「ブラウザ」といった用語は、日常的に見聞きするようになりましたが、意味が十分に共有されていない場合には理解しにくいこともあると思います。
- 不必要に外来語を使うことが増えている印象がある。記事に出てくる範囲で言うと政府は外来語が好きだ。作業部会でいいのにワーキンググループとしたり、対策本部ではなくタスクフォースにしたりと枚挙にいとまがない。どうして個人番号ではなくマイナンバーなのか、リテラシーに相当する日本語を考えなかった官僚は怠慢ではないかと声を大にして言いたくなるが、橋本治によると『公文書には日本語化された外国語を使う』というのが日本の悪しき伝統」とのことで、どうにもならないのかもしれない。民間も同様で、名刺の肩書のアーキテクトやテクニカルリード、さらにエバンジェリストに至っては IT 業界以外の人には相手にしていないのではないかと疑いたくなる。シンギュラリティの意味が分かる人がどれだけいるのだろうか。業界内で普通に使われる外来語は一般には理解されないことに留意が必要といった注意喚起ができたらと思う。訳語を使う場合でもマーケティング用語の differentiation が差別を助長するような「差別化」になるなど、業界用語が一般化することを念頭に置いていないのではないかというケースもある。

#### 表記の統一と個別性

- main を原語とする「メイン」、make を原語とする「メイク」、face を原語とする「フェース」といったカタカナ語表記が、主にマスメディアで広く使用されていますが、強い違和感があります。それぞれ「メイン」「メイク」「フェイス」という表記のほうが自然に感じられますし、実際、これら後者の表記の方が世間でも一般的に多く使われていると思われます。  
ただし、表記のゆれという観点から考えると、「メイン」「メイク」「フェイス」という類いの表記を目安とするのであれば、「メール」ではなく「メイル(mail)」、「ルール」ではなく「レイル(rail)」、「セール」ではなく「セイル (sale)」、「クレーム」ではなく「クレイム (claim)」等々が適切、ということになります。こうした画一的な規準を設定すれば、世間における外来語の使用の実際か

ら著しく離れた「目安」になってしまいます。

したがって、原語の発音やつづり方に則<sup>のっと</sup>って画一的・機械的に表記の統一を図るのではなく、現時点でどの言葉がどれほど世間に馴染み、根を張っているかについて、普及率や違和感などにまつわるアンケートもとりつつ、個別に慎重な検討を図るべきだと思われる。

○ 統一的ではない表記について検討が必要。

① 統一的なルール（以下は新聞表記に基づいて書いています。）

統一的なルールに従って表記するのが理想だが現実には言葉ごとに表記を決めないといけない状況が強まっている。

以前から「撥音<sup>はつ</sup>「ン」は原音ではっきりしているもの以外は省略する。ただし外来語として「ン」を入れることが一般化しているものはそれに従う。（例サマータイム 例外チャンネル）」というルールはあった。最近はこれに、「原音で「ウイ、ウエ、ウォ」の音は慣用が固定している語を中心に「ウイ、ウエ、ウォ」と書き、原音に近く書き表す場合は「ウイ、ウエ、ウォ」と書く」のようなルールが加わった。比較的最近入ってきた外来語はウイなどと書くのが一般的なためだ。慣用に従って使い分けるのは当然だが、使い分けの線引きが難しい。新聞だと朝日と読売は全てウイ・ウエ・ウォに変更、それ以外は時期尚早として使い分けている。

以下、少し例を挙げる。

- ▼ メード・イン・ジャパン、オーダーメイドは定着した表記と考えているが、化粧はメイクが一般的になったようにメイド・イン・ジャパンなどの表記が増えている。
- ▼ テークバックは定着した表記と考えているが、コロナ期間中にテイクアウトが席卷したことを受け、例外としてテイクアウトをテイクアウトに変更した。
- ▼ ロマンチックやドラマチック、プラスチックは定着した表記と考えているが、比較的最近入ってきた言葉はアコースティック、スティック、ファンタスティックなど、昔からの語尾チックではなくティックが一般化している。統一してドラマティック、プラスチックにすることは可能か、それとも現実的ではないだろうか。
- ▼ 同一の英単語にもかかわらず駅は（プラット）ホームだが、産業基盤などの場合はプラットホームになる。同様に弦楽器やスピーカーなど使うことによる経年変化で良化する場合はエイジング、肌など経年劣化の場合は（アンチ）エイジング。

② 音引きの有無

セキュリティー・セキュリティなど以前は音引きを付けて表記したが、最近では音引きなしにする傾向が目立つ。「サイバーセキュリティ戦略」など政府が率先するかのようになり音引きを付けない。このため一般語としてはセキュリティー、組織名など固有名詞ではセキュリティとすることが多い。正直、困っている。シングルファーザー・シングルファザー、モビリティ・モビリティなどの一方、アナキスト・アナキストのようにパンクロック以降は音引き付きが主になった印象の言葉もある。

コンピューター関連用語は、かつてハードの性能が低く1バイトでも情報を減らすため音引きなしだった。機器の性能向上を受けてマイクロソフトは2008年、

コンピューター → コンピューター  
プリンター → プリンター

ドライバ → ドライバー

など音引きを入れた表記に変更したが、最近、音引きなしの表記が目につくようになってきている。こうした音引きは日本語話者にとっての発音のしやすさから生じたものだとすると、表記だけ音引きがなく、発音するときは伸ばすという現象が生まれている。

③ 原音にどこまで従うか

新聞用語集はハロウィーンの一方、一般にはハロウィンと表記する。共同通信の場合、紙面用の記事ではハロウィーンを維持しているが、検索した際のヒット率を考慮しネットではハロウィンにしている。原音に忠実なことは重要だが、日本語話者にとって発音しやすさで表記が定まっていくなかで、世間と異なる表記になってしまう。

国語・日本語の音韻と表記との関係

○ 内閣告示の『外来語の表記』について、実際に日本語の音韻体系にあるのかどうかよく分からない表記(例: ヴが v を表す)は必要性がよく分かりません。表記法を用意することは構いませんが、v は表記があるが他の音は必ずしもあるわけではなく、日本語の表記を用意すべき基準が分かりません。

○ 『外来語の表記』の実施から 30 年以上が経過した現在、英語の知識の広がりなどから、第 2 表に掲げた仮名(「言い分け聞き分けの上では十分安定していないが、外来音としてある程度国語の中に入っていると考えられるものに対応する仮名」)の中に、言い分け聞き分けの上で余り無理のない、国語の中に入っていると考えてよい仮名がないか検討が必要だと思います。

○ 表記ということではないのですが、外来語(英語表現の日本語へのスライド表現)が多くて、意味が分かりにくいと感じます。

表記については、上掲の「外来語として定着しているか定かではなく、頻繁に使われている語句」の中で「バ」「ヴァ」の書き分けが特に気になります。(バリュー / ヴァリユーなど)。もともとある外来語でも『国語に関する世論調査』(R6)に示されたような揺れは気にはなりますが、使用者の言語感覚によるものだという認識でいます。また、「揺れ」については、発音と表記が対応していない例も結構あるのではないかと考えます。(「ダイヤモンド」と発音しているのに書く時は「ダイヤモンド」とするなど。)

これらのことが国レベルでの課題と言えるのか定かではありません。

○ 外来語の表記は、表記と同時に発音も示す、つまり表記と発音は一致することが望ましい。現行の留意事項 2 は「原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる」とあるが、その下の具体例はいずれも「外来音○○に対応する」となっている。また「外来音ウィ、ウェ、ウォ」などの表記があるが、この表記はどのように発音するのかの決まりはあるのだろうか。例えば Yeah! Yeah! Yeah! と 3 回繰り返した場合、最初のイは消えてしまう。エーが強く聞こえる。発音に沿って表記するなら最初のイが小さいイエの方が忠実になる。

いわゆるウ濁の用例は英語、フランス語、イタリア語、ロシア語なので上の歯で下唇を当てる発

音を示している。言語ごとのVの発音を知っている人がどれだけいるのかを考えると実際に使い分けるのは至難の業だと思う。またロシア語のVは「英語のv(fiveのv)の発音に似ていますが、下唇と前歯の接触が英語のそれよりずっと弱く、日本語話者にはむしろワの子音のように聞こえることがあります。日本語のバ行の子音とは異なりますので気をつけて下さい」(東京外国語大学言語モジュール)。1表と2表のウ濁の線引きは簡単ではない。

## その他

- 「IT技術」が典型的ですが(technologyと技術)、特に外来語と旧来の日本語を組み合わせた言葉の場合、意味が重なった表記になっているケースが散見されることが気になります。

---

問2 「外来語の表記」(平成3年内閣告示第2号)の第1表、第2表に示された表記のうち、一般の社会生活において、ほとんど用いられることがないと考えるものがあれば、お答えください。

- 特になし。
- すべての表記について用いているように思います。
- 外来語の書き方の用例集には地名、人名も多い。一般名詞では不要かもしれないが、各国語の地名や人名を表すのには必要なものばかりではないか。
- 以下のものは発音としてほぼ使用されないのではないかと思ったものですが、表記として使われるかどうか、例えばBCCWJコーパスで調べたりすると良いのではないのでしょうか。  
「クァ」「クィ」「クェ」「クォ」「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」「テュ」「ヴェュ」
- 第1表：ツァ、ツェ 第2表：クァ、ヴェ  
これらの表記は、現代の一般的なビジネス文書、技術解説、生活情報コンテンツ(デジタルコンテンツ含む)において、特定の固有名詞や極めて限定的な専門分野を除き、ほぼ淘汰されている(実生活で用いられることがない)のが実態であると考えます。
- 第1表の中では、「ミョ」「ヒャ」「ビャ」「ピャ」「ギャ」「リャ」は出現頻度がかなり低いのではないのでしょうか。(特定の外国の地名や人名、料理名といったもの以外ではまず見たことはありません。)
- 第2表の中では、「フュ」はまず見たことはありません。「イエ」、「ウエ」、「クェ」、「ヴェ」、「ヴェュ」、「ヴォ」の出現頻度も低いのではないのでしょうか。(特定の外国の地名や人名、料理名といったもの以外ではまず見たことはありません。)

- テュ、ヴュなどは使用する機会が少ないように思います。
- 「クェ」はほとんど見かけないように感じています。例えば、「クエスチョン」は、コーパスの横断検索でも1952年の例が2件のみで、「クエスチョン」と書かれているのではないかと思います。

---

問3 「外来語の表記」(平成3年内閣告示第2号)の第1表、第2表にはない表記(例:スイ、グエ、ヒエ、ヴヨ等)のうち、一般の社会生活において、よく用いられ既に定着していると考えられるものがあれば、具体例を添えてお答えください。

- 特になし。
- この例は存じません。
- 外国の人名で、「グエ」は頻繁に見かける。ベトナムのグエンさんである。ただ、一般の社会生活で「すでに定着した」とまでは言えないと思われる。
- テクニカルコミュニケーション(TC)の現場および一般生活の視点から、以下について定着が進んでいる事例として提案いたします。
  - 「スイ」:一般の生活において「スイーツ」「スイート(ポテト等)」などの表記が、特定のニュアンスを表現する言葉として日常的に使われています。
  - 「ウィ」:告示の「第2表」に分類されていますが、現代では「ウィンドウ」など、事実上「第1表(一般的な範囲)」と同等に広く定着していると考えられます。
- 「ニェ」は「ヴィニェット」という単語、「ヒエ」は「ヒエロニムス」という人名表記、「キェ」は「キェルケゴール」という人名表記で私自身はよく見覚えがありますが、一般の社会生活においては定着しているとは言えないでしょう。
- 「スイッチ」「スイーツ」はかなり定着しているように思われます。「ヒエ」は、ドイツの都市「ミュンヘン」の例くらいしか見かけませんが、これも「ミュンヘン」が定着しているようです。「ヴヨ」は、「ヴヨサリバーピマコットンシャツ」という衣料品もあるようですが、私自身は馴染みがありません。

---

問4 日本語として定着している外来語表記は、原語の発音やつづりに近い書き方でない場合があります(例:タイガース/タイガーズ、アイロン/アイアン、ジェミニ/ジェミナイ)。このことについて、課題となり得ることがあればお答えください。

- 日本語としてどのように発音されているかを表記した結果の揺れだとして、このような揺れも言

語の自然な姿なので、課題は感じません。

- ネイティブの日本語使用者にとっての発音のしやすさというものも重要であるので、<sup>しやく</sup>子定規に原語の発音やつづりに近い書き方に統一するものも問題だと考えます。たとえば、「マイルス」よりも「マイルズ」のほうが原語の miles に近いですし、「ライティングス」よりも「ライティングズ」のほうが原語の writings/lightings に近いでしょう。けれども、「マイルズ」や「ライティングズ」は日本語ネイティブの多くにとって発音しやすいものではありません。こうした点も考慮しながら、日本語としての外来語の表記として適当なものを検討する必要があると思います。
- 既に定着している語の場合、原音の発音やつづりとは異なる表記で安定しているのではないかと思います。

問1の回答とも重複しますが、原音の発音やつづりに近い書き方が増加していくように思います。しかし発音まで原音に近くなるとは考えにくく、その結果として、発音と表記とのずれが広がっていくのではないかと思います。このことを許容するか、やはり発音と表記とは一致させる（あるいは、なるべく一致させる）のが望ましいとするか検討が必要だと思います。
- Sの清音、濁音などはいまさら問題にするべきではないと考える。国名表記をマレーシアからマレーシアに変えることは現実的ではない。英語のスペルのローマ字読みではないかと思われる表記が定着した後、原音に近い表記が広まることは珍しくない。例えば、Andrews だと俳優はジュリー・アンドリュースだが、アンドルーズ米空軍基地だし、英国王の弟はアンドルー元王子だ。
- 原語の発音・つづりに対応していなくても、日本語として定着している形を使うしかない。

ただし、リウマチ（オランダ語 rheumatisch に由来）などは、日本人の実際の発音は、ほぼリウマチに聞こえ、リウマチと割って発音しても大してオランダ語の発音に近いわけでもなく、かつ英語・米語の発音（ルーマティズム）とも遠い。リウマチという表記は少々理不尽にも感じられる（変えるべきという主張ではない）。
- 日常生活においては特に課題を感じていません。強いて言えば、外国語学習の際に、日本語として定着した表記と原語との対応関係が分かりにくい場合があるかもしれません。ただし、その点について実際にどの程度影響があるのかは分かりません。
- 日本語母語話者が外国語を学習する際に、日本語のカタカナ表記から想起される音が干渉して（邪魔をして）、なかなか原音の発音を習得できない。
- 非母語話者との間の意思疎通に支障をきたす可能性がある点。原音と異なるカタカナ表記が日本語でなされ、一般に通用しているため、同じものを指していることに互いに気づかない。例：ビール
- これは近親者から聞いた実話である。アジア圏から来た技能実習生が、日本語で会話していて「ダ

ータを…」と日本人社員に何度伝えても通じず、文字で「data」と書いてようやく理解してもらえたという。その時、日本人社員から「ちゃんと英語で言いなさい」と注意を受けたとのことである。

Dataには、カタカナで書くと「データ」「ダータ」となる2通りの発音があり、特にオーストラリアでは「ダータ」の発音が聞かれるとされる（私自身が35年ほど前にオーストラリアに住んでいた時も、dataは「ダータ」と発音されていた）。この実習生は、「ダータ」の発音で英語の教育を受けたのだろう。一方で、アメリカ英語では「データ」と発音されると言われる。

この例は原音が2通りあるため、外来語の表記の話とは少し異なるものの、今後非母語話者と共生していくにあたっては、日常的に使用頻度の高い語について、互いに必要な知識を持っておく助けになる場面があるのではないかと思う。例えば、非母語話者は「日本ではdataが「データ」と発音され、カタカナ表記されること」を、母語話者は「dataはダータとも発音されること」を認識しておくというようなことである。

- 例示のような日本語として定着している表現は、母語日本語話者としては課題とも思わないのですが、外国の方には混乱を生じさせるように感じます。また、義務教育の英語科授業との関連という点では問題となる場合もあるかもしれないと思います。（特にタイガース。ただ、固有名詞として定着してしまっているので、このような例は児童生徒も「そういうものである」と受け取るかもしれないと思います。）広島カープの名称変更が思い出されますが…。

- TC（テクニカルコミュニケーション）の視点から、「国際的な情報の互換性」の観点で課題となり得る点を補足いたします。

日本語特有の慣用表記（例：アイロン／英：iron、ジュミニ／英：Gemini、チタン／独：Titan）は、海外のユーザーや英語ベースの知識を持つ人が日本のドキュメントを読み解く際、同一の概念であると直感的に理解できない障壁となります。また、多言語翻訳の自動化やシステム連携において、原語と日本独自の慣用表記を紐付けるための特殊な辞書管理が必要となり、情報の流通コストを増大させる要因となっています。

- 日本語非母語話者で、母語が当該の原語を使用する話者の場合に混乱が生じるかもしれません。あるいは原語の発音やつづりに近い書き方でない場合の表記が、たまたま別の語のそれにむしろ近い場合があるかもしれません（AIに尋ねてみると、英語話者が「コップ」と書かれていると容器の「cup」ではなく、警官の意のスラング「cop」と間違える例などが紹介されています）。
- 原語の発音との関係については、日本語非母語話者（日本語学習者）からは、「なぜヒーローは「アイアンマン」になるのか」といった戸惑いの声が聞こえてきます。

---

問5 「外来語の表記」（平成3年内閣告示第2号）は現代の国語を書き表すためのものですが、日本語非母語話者にとっての理解のしやすさの観点から、課題となり得ることがあればお答えください。

- 問4で書いたことに関連するが、カタカナ表記から原語に復元できず、意味を理解するのに時間がかかったり理解できなかつたりすることが多々あるのだろうと推測する。特に、緊急時には支障がありそうである。
- 縮約形になると語形が変わる語が多い点も、非母語話者にとっての理解のしやすさに影響がありそうである。例：スマートフォン⇒スマホ
- 同僚に聞いてみました。(台湾の方で、中国語、英語、日本語がネイティブ並みに使用できる方です。)
 

外国人の方も日本の児童と同様に日本語を学ぶとき、片仮名は第1表から学んでいるようです。しかし、「何か変だな」と思いながら学ぶようです。例えば「バイオリン」については「V」の音はどこに行ったのだろうかと思いながら覚えるとのことでした。それで、日本で暮らしていくうちに「ヴァ」があることを知り、発音に近い表記を使うようになっていくとのことでした。長音符号のあるなしも同様で、日本語の習得が進むにつれ原音に近い表記になっていくと伺いました。

外国人の方にとって片仮名(外来語)表記の習得は難しいようで、特に英語由来の外来語については、英語が普及しているだけに音節の違いが理解しにくく大変だとのことでした。
- 非母語話者が分かりにくいことがあれば知りたいです。
- カタカナは漢字などの「読み」として使用することがあり、外来語なのか、漢字の「読み」として使われているのかの判別ができないことがあります。
- 加えて、「カタカナ表記(音変化)の規則性の不透明さ」も大きなハードルです。原語の語尾の長音化(例：Table→テーブル)や、日本語にない音の補完ルールには例外が多く、非母語話者にとって予測が困難です。製品安全や操作に関わる重要な情報(利用者用情報)を誰もが正しく理解できるよう、例外的な慣用を減らし、表記ルールをより標準化していくことが、今後の多文化共生社会において不可欠であると考えます。
- 日本語非母語話者で、母語が当該の原語を使用する話者の場合に混乱が生じるかもしれません。あるいは原語の発音やつづりに近い書き方でない場合の表記が、たまたま別の語のそれにむしろ近い場合があるかもしれません(AIに尋ねてみると、英語話者が「コップ」と書かれていると容器の「cup」ではなく、警官の意のスラング「cop」と間違える例などが紹介されています)。(再掲)
- 非母語者にとって外来語は鬼門だ。先に挙げた音引きの有無、ウイ・ウエ・ウオかウィ・ウェ・ウォかなどの問題は母語者にとっては表記の違いでしかなく、どちらで書かれていても理解できる。エアもエアーも英語のAIRであることは分かる。しかし非母語者にとってはエアもしくはエアーがAIRであるという仕組み、法則が理解できない。
 

統一的なルール、分かりやすさのためむやみに外来語を使わないことが重要だ。

自身の経験を次に挙げる。

- ① タイに赴任している時、時間があると辞書を片手に新聞を読むよう努めていた。傷害事件の記事を読んでいて“ บาร ”という言葉でつまづいた。事件の現場であることは文脈から分かる。辞書を見たが載っていない。固有名詞かと思ったが、どうやら違う。仕方なくタイ人スタッフに尋ねた。” It’ s Beer Bar ” 笑いながら答えた。こうした言葉は学習用の辞書には載っていないことが多い。学んでいる外国語に集中するあまり外国語由来の言葉が混じるとは爪の先ほども思わない学習者にとって外来語、とりわけ表記された外来語は高い山もしくは深い谷だ。
- ② バンコクで日本人向けのネットマガジンの編集をしている知人に記者ハンドブックが欲しいと頼まれた。日本語で記事を書いているタイ人スタッフが欲しがっているという。記事を書ける日本語能力はあるにしても、言葉や表記の使い分けに悩むほど語彙が多いのだろうか。とハンドブックが必要な理由をたずねると、「外来語にはさまざまな表記があってどれにしてもいいかいつも困る。外来語を表記するときの手引が欲しい」とのことだった。
- 原語の発音と乖離した慣用の表記が分かりにくそうです。例えば、「スウェーター」ではなく、「セーター」となることなどです。
- コンピュータ／コンピューターのように語形自体も揺れているものと、パーティ／パーティー、タトゥ／タトゥーのように表記が揺れているに過ぎないものが併存するのは、母音の長短の対立を苦勞して習得することもある非母語話者には負担が大きいかもしれない（どうしようもないが）。
- 先述のリウマチのようなケースも同様である。
- イエローのイエ、ツイッターのツイは、どう考えても2モーラであるが、イエロー、ツイッターという表記も珍しくないというようなことが起こる。日本語母語話者には些細な<sup>ミ</sup>ことでも、理不尽に感じる非母語話者もいるであろう。
- 「外来語の表記」において「留意事項その1（原則的な事項）」の「4 国語化の程度の高い語は、…」とありますが、個々の語の「国語化の程度」をどのように判断するかは、日本語非母語話者にとって難しい場合があるかもしれません。

---

問6 上記のほか、外来語の表記に関して論点や御意見があれば、自由にお答えください。

- 学校教育では片仮名についての指導が平仮名、漢字に比べて手薄な印象を受けます。外来語表記も子供たちが生活の中で第2表の書き方を発見したり、別の表記があることを知ったりしながら自身の言語感覚で使用していくように思います。私自身はこれでいいように思いますが、今回外国人同僚の話聞いてみて、近年加速度的に増えている外国籍の児童生徒にとっては難しい要素があるように感じました。

- ここでいう「外来語」は日本語のことだと考えていたのですが、正しい理解でしょうか。つまり、ここでいう「表記」は、あくまでも日本語の音韻表記である、と理解していたのですが、しかし、そうだとすると、「留意事項その2」にある「外来音」のあたりの記述に混乱しました。外来音とは何でしょう。私の理解では外来語にのみ生起するがあくまでも日本語の音（節）、だったのですが、「外来語の表記」を読むと違うのかもしれないという気がしてきました。

例えば、違う発音だから違う表記を使う、というのが原則かと思いましたが、同じ発音が二通りの表記で表されるということが意図されているのではないのかもしれないと思い、混乱しています。例えば、「イェ」ですが、これは[je]（1音節）という音を表記するためのもので、「イエ」という表記は[ie]（母音二つ、2音節）の発音を反映したものですから、両者は異なる発音を表記したものというのが私の理解ですが、説明を読むと、同じ発音の異なる表記の仕方なのかもしれないとも読めました。あるいは同じく「留意事項その2」で「～と書く慣用のある場合」という表現ありますが、これは、「書く」というより、そのように発音していてそれを表記する場合、ということではないかと思うのですが、「書く」となっています。

- 借用語音韻論では、いくつかの音（例えば[ɸ]）はすでに innovative system では音素として確立しているという主張もあります。その観点から言うと、（きちんと発音調査をしないといけません）第2表にあるいくつかを第1表に移しても良いのかもしれない。
- 一般に強制する必要はありませんが、法令や規格（JIS など）では表記の統一基準があるとよいと考えます。
- 情報がデジタル化し、AI（生成 AI や LLM）がドキュメントを構造的に処理する現代において、外来語表記は人間が読むためだけでなく、「データ仕様」としての重要性を増しています。国語施策における表記の指針におかれましても、将来的なデジタル情報流通のインフラ（基盤）を支える視点から、法令・JIS 等と連動した、より論理的で体系的な表記ルールが示されることを期待いたします。
- 表記のゆれや、原語との意味のずれ、原語には存在しない言葉（和製英語）などは、やはり問題となるでしょう。
- 『外来語の表記』の実施から30年以上が経過しており、平成3年には用いられていなかった、新しい外来語もあります。付録の「用例集」については、語の追加・削除の検討が必要と思います。
- 問2、問3に関連して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）の出版SC（雑誌・書籍・新聞、約3300万語）、特定目的SC（Yahoo!ブログ、Yahoo!知恵袋、約2000万語）で調査を行いました。以下、その結果について、簡単に書かせていただきます。なお、誤解析を含むデータでの集計結果ですので、精査の結果、若干傾向が変わる可能性があります。

調査対象：第1表の仮名のうち「ツァ・ツェ・ツォ・デュ」

第2表の仮名全て

第1表・第2表にない仮名「グィ・グェ・グォ・シア・ヒェ・ウァ・ヴァ・  
ヴョ」

- 調査項目：① 各仮名の頻度  
② 各仮名が用いられている語の種類（異なり語数）  
③ 各仮名が用いられている語における固有名詞（地名・人名等）の割合

#### 調査結果【第1表、第2表】

- ① 仮名の頻度：高頻度の仮名と低頻度の仮名とがある。調査した第1表の仮名は、全て頻度100以上であったが、第2表の仮名には、以下のように頻度100以下の仮名がある。

「クェ」94 「クァ」32

- ② 語の種類（異なり語数）：多くの語で用いられる仮名とそうではない仮名とがある。異なり語数50以下の仮名は、以下のとおり。

第1表 「ツォ」34

第2表 「イェ」42 「テュ」36 「クォ」20 「グァ」18 「ヴユ」15

「クィ」15 「クァ」10 「クェ」8

- ③ 固有名詞の割合：第1表の「ツァ・ツェ・ツォ・デュ」では、固有名詞の割合が60%を超えている。

第2表の仮名のうち固有名詞の割合が50%以上の仮名が14種類あり、このうち10種類は異なり語数100以上の仮名である。

第1表 「ツァ」65% 「ツェ」87% 「ツォ」79% 「デュ」65%

第2表（異なり語数100以上）

「ヴィ」77% 「ドウ」74% 「ヴェ」73% 「ヴァ」69% 「トゥ」67%

「ウィ」66% 「ヴォ」64% 「ウエ」62% 「ウオ」59% 「ヴ」55%

以上の調査から、頻度の面では第2表の「クァ」、語の種類の間では「ヴユ」「クィ」「クァ」「クェ」が、ほとんど用いられることのない仮名と言えるかもしれません。

しかし、主として2001～2005年のデータが中心となっているため、BCCWJ2による調査が必要です。また、第1表、第2表の仮名のいずれも固有名詞の割合が高くなっています。固有名詞は、基本的に低頻度のものが多いと思われるので、5000万語程度のデータ規模では、余り出てこない可能性もあります。固有名詞について更に調査をしないと、本当にほとんど用いられないとは言い難いと思います。

今後の検討では、固有名詞が重要になってくるように思います。ただ、どのように調査するか、難しい面もあるように思います。

#### 調査結果【第1表・第2表にない仮名】

- ① 仮名の頻度：いずれも低頻度である。なお、「ヴョ」は出現しなかった。

「ウァ」32 「グィ」29 「ヒェ」26 「シア」24 「グォ」6

「ヴァ」5 「グェ」4

- ② 語の種類（異なり語数）：いずれも低頻度である。語数が少ないため、固有名詞の割合を示すことはせず、括弧内に固有名詞の語数を示した。

「ウァ」7(6) 「ヴァ」1(1) 「グィ」4(4) 「グェ」2(2) 「グォ」1(1)  
「シア」7(2) 「ヒェ」6(4)

以上の調査からは、よく用いられ、既に定着している仮名はないと考えられます。外来語の表記は、固有名詞も含めて、第1表・第2表の仮名でまかなえていると考えられます。

ただし、8種類の仮名に限定した調査ですので、片仮名表記の外来語と固有名詞を全て抽出し、どのような仮名が用いられているかを調査する必要があると思います。また、BCCWJ2による調査や、固有名詞に関する調査も必要だと思います。

- ネットである語句を入れて検索する際に、「あいまいに」検索することができますが、これはどの程度の範囲で可能か（たとえば、表記が平仮名でも片仮名でも拾ってくれる、文字列が2、3字違っていても拾ってくれる、など）という観点から、外来語の表記に関係する問題などはないでしょうか。
- 用例集にある「メーキャップ」のような、二重母音[ei]に関する表記のゆれが気になっています（「メイク」「ディスプレイ」「ネイル」「デイ/デー」「プレイ/プレー」など）。小椋委員が研究なさっていてお詳しいと思います。  
「外来語における[ei]の表記のゆれ」（小椋秀樹委員）  
[https://www2.ninjal.ac.jp/past-events/2009\\_2021/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop\\_no8\\_papers/JCLWorkshop\\_No.8\\_09.pdf](https://www2.ninjal.ac.jp/past-events/2009_2021/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no8_papers/JCLWorkshop_No.8_09.pdf)
- 「フュ」を用いる語は少ないですが、「フューチャー」の表記が定着していて、「ヒュ」とは置き換えがたいと感じています。
- デジタル機器で文字を打つようになったことによる変化があるのではないかと考えています。例えば、「ァ」「ゥ」と小さい字を入力するには、手間がかかるので、表記へのこだわりがなければ、わざわざ行わないのではないかとこのようなことです。
- 新しく定着した外来語音の中でも、短歌・俳句に詠み込むとき、
  - ① ティ・トゥ・ファ・フィ のように一単位で扱えるもの、
  - ② ウィ・ウェ・ウォ・イエ・ツイ のように一単位では扱いにくいものに分かれる。第一表はすべて①であるが、第二表に①②が混在する点、整理の余地があるかもしれない。
- ヴァ群については、他の問題と異質であるので、別枠で扱いたいところ。
- 「外来語の表記」は、全体的に説明の表現に苦勞がしのばれるが、「(英語を習っていない)小学生にも理解できる説明」というような制約があったのか？